

保護犬・保護猫の飼い主さんとなった方々から実体験をお話いただいた後は、モデレーターの西村亮平先生（日本ペットサミット会長、東京大学獣医外科学教室教授）の進行のもと、質疑応答が行われました。

－劣悪な保護団体を排除すること、よい保護団体を支援すること、フォスターさんやボランティアさんの負担を安易に増やさない、この3つが保護活動を続けていく上で大事なことだと思っていますが、皆さんはどのようにお考えでしょうか。

松原さん：いい保護団体とそうではない保護団体ということについては皆さんが気にされているところだと思います。実際に私もよくそのようなことを尋ねられるのですが、どう答えていいものか困っています。全てにおいて100点満点のボランティア活動、保護活動があるのかな？と。科学的なアプローチで犬や猫の管理が適切かどうかというところの判断については、獣医師など専門の方々にもっと積極的に関わっていただき、評価していただけるといいのではないかと思います。一方で、保護活動に関わる方々の一般的なコミュニケーション能力も向上していかないと、いくら犬や猫の管理がよくてもなかなか譲渡数が増えていかないとも思います。保護犬や保護猫を飼ってくださる方を増やすには、いろいろな側面から保護活動をより魅力的に見せることと同時にそこに関わる人たちの数を増やすことでレベルアップ出来るといいのではないかと思います。私もフォスターアカデミーなどで頑張っているところです。

西村先生：実は今、保護団体さん用の、犬や猫が健康に暮らすためのガイドラインを作りつつあるところです。そこにはワクチンプログラムなどについても含まれています。具体例を挙げてのガイドラインを出すことは、たとえそれが完璧ではなくても保護活動をうまく行っていくための指標となりますし、大切なことのひとつだと考えています。

水越美奈先生（日本獣医生命科学大学）：保護犬や保護猫を家族にすることを選択肢の一つとして考える、という姿勢は非常にいいことだと思います。しかし行動診療を専門としている立場として、最近保護犬・保護猫の患者さんが多くなっていると感じます。攻撃性があるにもかかわらず譲渡してしまう団体があったり、かわいそうだからという理由で譲渡をしたり引取ったりすることで、お互いが不幸になってしまっているケースを数多く見ているのです。シェルターの環境と家庭の環境はガラリと変わりますので、そこで行動が変化することは大いにあります。当たり前のことではありますが、ペットショップから買う犬猫も、団体から譲渡してもらう犬猫も、飼い主さんとその犬や猫がハッピーに暮らせなければ何も意味がない、と思っています。ですので、ペットショップから買うのは悪だ、かわいそうな犬や猫を引き取らなければならない、というような極端な意見に向かわないでほしいというのが、実際に私が問題行動の相談を受けていて感じていることです。